



水色回旋



短歌詩集 1

izchan

章

頁

目次

.....	
・ 1	
水色回旋
・ 2	
しずり雪
・ 3	
花びら雪
・ 4	
な、生る如月
・ 5	
新・徒然なる一日 (izchan & 塚元寛一) 6
物理化学えくりちゅーる
・ 7	
春の叫び
・ 8	
ゆりかご
・ 9	
春の鈴
・ 10	
モクレンの道
・ 11	
思わせぶり
・ 12	

すずむしの羽ずれおどる涼風の
しらべは波て朝のトースト

琥珀おつドリップの音やわからかに
香りにそまる陽のある部屋に

なんということもなく、私の1日のしろい胎動。
でも、切ない想いが水色回旋...、やっぱり迷路。

屋根の空のうぜんかずら憧れて
オレンジ花は這いのぼり咲く

イノチと折半いたしております、とウンが申すのでございます。
奥座敷の床に伏せる青白きウグイスが謂ふ。

回雪にキラメキつづく薄日かな
鶯あおく梅枝のつぐみ

運との折半・『運命』のことでしょうか、しかし返事はなく、
中庭の老梅は対の紅白であろうか、と目を遣る。

老梅の芽でたき冬日しずりゆく
紫雪もみえぬ魂や移ろひ

春になれば梅も咲きましょう、慰めのように謂って
雪曇りになった空を見上げる。
ウグイスの囀りをこの中庭で聞きたいものだと思いながら
屋敷を後にした。
帰り道は、小米雪が降った。
この季節、何処にでもある粗目雪の歩道が格別美しく見えた。
二月の中日のことである。

『いちごぱふえ』って、音からしてなんとも美味しそう。
それに、このキュートな色合い。たとえるなら

紅椿きみが姿の愛おしさ
花びら雪にみえかくれして

ああ、でも、目の前にすわってる叔父さまは
この乙女チックを

紅椿まだらに摘まれ棹のさき
薄暮の庭に雪ははだれて

なんて、わたしの食べっぷりを茶化したりする。
そしてコーヒーをゆっくり啜って

唇にふわり風花べに椿
頬に飛雪の泡しぐれかな

かなちゃん、ほっぺにもクリームがついてるよ。
と笑う。
かな、今度はここの『くれえぷ・しゅぜっと』が食べたいな。
叔父さま、デザインが売れたらまた連れてきてね。

三日月のけらりけらりと笑い来る
雲間にかくれ何処へいったやら

思い出は輪郭をぼかしながら感情を切なく溶かし込む。
よく笑う叔父だったが、
正義感が強く、恵まれた軌条を歩くことをしなかった。
この世の翳りを月の満ち欠けのように眺めていたのではないかと
思う。

凜然と天空を一直線に仰視し続けきった人だった。

な、生る如月

まだ少しだけ、ねむりがコトバをゆるくする。
いざないの波。
…なぼなぼ 「た」の音はジャブを打つから
今はまだ、なぼなぼ。
「な」は、なんだろうの導き。
今日という1日を「な」で始める。

羽毛布団は、ネコなでなで。
なめる。
なめられる。
し、し、舌がジャリジャリするー。

薄曇り。
天気予報あたる。

イヌとお散歩は、「た」の音のジョブ。
スティーブジョブズ。
革新的な人、だいすき！
憧れのあの人、夜中に詩を書いたかな。
どんな詩を書いたかな。
うーん、ドキドキー。

イイことも、そうでないこともあって。
なんでもないこともあって。
ともあれの1日。

あ、朝陽の金いろりボン。
予想が外れる。
だから、おっかない。
だから、おもしろい。

今日の靴は、いつものスノーブーツ。
履き心地抜群。
ガラスの靴って、痛いだろうな痛い。

ナビゲーション。な、生る如月はだれゆく。
句読の点点、下駄の泡雪。

なにはともあれ、おはよう！

山の小径、
歩いていると、まだ起き立てのキャンバスがちいさな欠伸する
この手。つゆ、あさのつゆ。
眠りの残り香を押し出して。
瞬く間に、口ずさむ舌が濡れる。

朝ぼらけ手折れぬほどの小ささで
こそばゆく笑む白き花群れ

野苺の花はいじらしく坐り、見あげている。
朝のソラ。水色のアルトを吹流し、色の音階をなぞる。
そのうち太陽をひっぱりあげる四角いフレームに山の稜線が白む。
ふと想う、古人のスケッチ。
万葉秀歌。
やうやう明けゆく山際は玉響なうつろひに霞み、
ローレライの古詩は夕陽のフラッシュが鮮烈に叩き
山際をキラメキで覆っている。
おお！…——
現代の詩は自然の色彩をもち得ているか、勝ち得ているか、
という問いすらも。こだま。人の思念のおよばない山の朝に、
溶かし込むパレット。

山みちに空は降り立つ晴れやかに
閉じたるウタも合歓葉も覚めて

そよ風は、
二階のあたしのこの部屋の窓を気に入っていて…
ひるがえるたびにひかりが
ゆ・れ…る——ちゅーりっぷ柄のカーテン
襞にこそっと隠れては擦り抜け…ゆ・れる…ゆれる。
躊躇いがちな、ほつれ毛に触れられ、ふっと執筆の手を休め。
キラリと、視える——ひかる、なみ、の、るてん。
若葉の海に躍っている。コナラ・クルミ・ヤマモミジ。
広葉樹のトンネルをくぐりぬけると針葉樹のまっすぐな太い幹。

と・ま…る

さっきまで働き者だった啄木鳥。望遠する。

無音が存在を喚起する。

可らしい――…

小昼するアカゲラほどの口自慢

桧舞台に木霊の憩い

とどまらない静止画のような、

この風景にもぐりこみ寝転んで目を瞑る。

ウサギの心。

あたしの背丈はどんどん小さくなって草より少し高いもの

――草いきれに分解され…浸透する。

不來方の風の色に染められてゆく啄木の歌碑。

いつか見たせいだろうか

切り株が青き雲間に添い寝する

破れ日傘に夢の端を貼り

やがて日時計代わりの樹木の影が伸びはじめ、

解除される独りだけのストップモーション。

午後のはっきりした輪郭時間、

やおら目いっぱいムキになり筆を進める。

可らしい――…

仰望す空がころんで茜雲

ぐーの音喰らい筆を匙加減

フトコロ具合――

つまりは。

人間はグルメな生物種で、食餌はDNAの生機構で。

という生物学的葛藤。

つまりは。

ピッツァを注文しようかしら、シンプルな和食を作ろうかしら。

という生活臭的選択。

今夜はともあれ、白米の有り難味。

…でも、こういうの…。

難解な現代詩的思考で、ガチガチの肩凝り。

...いきてる味わかんなくなりそう...

銀シャリに一汁一菜みぞれ和え
干物一匹どうぞボナペティ！

暗がりの底――

ままよ、と。

昼の煩事ウマシカは跳ね除ける。

人生は悲劇か。

喜劇か。

シェークスピアは何と語るだろう。

‘心のこもらない言葉は決して天には届かない’。

ハムレットだ。

例えば、あたしの台詞。

「傲慢の剣の黄色く濁った目玉、

何と醜きこと。

振りかざすことを自制しない、

底のない卑しさよ。

ああ！見よ。

あの、いぎたなく穢れた魂を。

悪しき言霊の行列を。

やがては女神の天秤に刎ねられ、

詩の涸れた井戸に縋り、

ただ虚しく枯れ果てるのだ。」

すべては夢の汀...

星定規古代のロマン線彫りし
しずやかなる夜空の神話。

あたしは探求するヒヨコだ。

どこそこひょこひょこほっつき歩き、クチバシを打ちつけコロコロ。

黄いろい好奇心は痛かったりする。

先生はヒヤヒヤして見てるみたいだけど、笑って。

"Life is tough."

好奇心————

ソレは、熟した未熟さの遺伝子のプログラムで、

豊穡の、青っぽいフルーツ。

どうしたって‘萌えるウネリ’だから止みがたい。

あどけない解けない好奇湧きいずる

36億ブシュケーの海に

科学のクラスの1つ、物理化学、っていうのは、

あたし的には、クールでイカしてる。

現象そのものに詩があり、数式は洗練された言語の1つ。

スイス人言語学者のソシュールの言え、

物理化学の知識がラング（言語構造）なら、講義はパロール（話し言葉）、

フランス人哲学者デリダ的に言え、

教科書や板書はエクリチュール（書き言葉）、ってことになる。

"Physical-chemistry is beautiful!"

横長の教室、ステージの上で数式とダンスしてた人が

すとおぷ・ざ・もーしょん。

（えっ、なに？）

量子力学、の物理式を導き終えたときの、

老教授の恍惚的パロールときたら。

紅顔の少年みたいに————壇上でガッツポーズ！

耀耀（あかあか）と神話のごとき導きで

エクリチュールを赤赤灯す

知恵の輪みたいな、板書。

数式インターチェンジが得意じゃないあたしには、

教授の発話のほうが、

よほど美しい詩だとおもうな。

ある疑問――

もう1つ大いなるエクリチュール、教科書について。

- ・ P. W. Atkins 著 『Physical chemistry』
- ・ 千原秀昭 & 中村宣男 共訳

原書が教科書で、整然と織られたタペストリーみたいに
構成も説明もわかりやすく、美しい！

でもオドロキは、邦訳。

忠実で無駄のない物理化学の翻訳本、なのに。

詩、を感じるから、フ・シ・ギ。

ただ一つの詩表現も、

なんの感情表現もなしに。

叡智の城壁をいとも軽々と飛び越える、

おまえよ。

その翼はあまりに美しく、

ついつい決まりごとも忘れ、

私は魂の揺さぶりにウツトリとしてしまうのだ。

――詩とよばれない、詩。

おまえは何処に生まれいずる、

鳥なのだ。

春の叫び

淡やかにハルの切なはくぐりぬけ
萌えくる色を花にそめゆく

わずかな洞窓に、兎は日々の風景をとめる。
潤む…。

ハルのうつろいが哀しいか、と問う。
決して兎は、ウンメイがとは眩かないから、
ふふふ、とウグイスは桜の枝で、
兎の天真に笑む。

咲けよハル夫夫なりの爛漫で
紅き情熱ひそます花芯

桜いろ、
サラと掬い懐の水鏡に落としてみると、
蒼い水底がゆれて記憶のカケラに縋りつく感情たちが、
がらがらと忙しく笑ったり泣いたりする。
余程ハルという想いは、
いつまでも愛しいことなのだろう、と謂おうとして
噤む…。
おそらく、与り知らぬことだろうから。

野に跳ねよ花樹に歌えよ漫ろ泣く
ちいさき者をいざ人と呼べ

さざ波は泪の潮でしょう
脱け殻はたぶん星のまたたきだから
泣いたりせずに
砂のやさしさを歩きましょう

(くずれそうな足
(蟹が横目で晒う

風の波は泪のゆくえを
そっと囁いています

星空をちいさき笛でせせらいで
かなしい詩に夢つむぐかと

ひとりひとりの時のオルゴール
いくついくつの心の鍵

..るるり..りりる..

砂のやさしさを歩きましょう

早春の水面のキラメキは
あの子のヒトミに似て淡すぎて画布に
つかみとれずにいる
幾度なく練ってみてもあの子の悲しみの色合いが
パレットに溢れるばかりで
潮騒のように
耳でつかまえるしかないのかもしれない

キラキラと走りくる日々画布に塗る
魂鈴のいろ鳴りてしゃんしゃん

モクレンの道

朝靄を
みるみる黄金色に馴染ませ
陽が昇る
モクレン、艶やかな紫...ヒカリが目を惹く
うつくしいな..

木に纏うモクレンの羽光りきて
闇をふりすて朝に飛び立つ

明けることが
すべからく望まれたモノのように
陰影の曖昧さが
闇の執着から剥がれ落ち
トウメイな音階へと
昨日のこともグラス一杯の水で
純化できるからフシギ..

響き合うクリスタル音葉をくぐり
緑の露を瞳にゆらす

ぴちゅぴちゅ..ぴちゅ
囀りが梢をめぐり一一..風が
教えてくれる
肢体の白い伸びやかさ
だから朝がすき..

ジョギング波すり抜け走る樹々の道
バネから飛び散る心の軋み

- ※ 花びらに おしゃべり・ベルが 揺れてるよ
- ※ みえない魔法 きこえるハナシ

3月21日 晴れ
うすいピンクの羽つけて
桜の精とデートする

るふふ～♪ りりる～♪

「お嬢さん、1曲いかがですか？」
「花吹雪のワルツにはまだ早いわ。」

- ※ 花びらに おしゃべり・ベルが 揺れてるよ
- ※ みえない魔法 きこえるナイショ

3月17日 曇り
うすい紫のドレス着て
モクレンの精と読書する

うふふ～♪ りりう～♪

「お嬢さん、1篇いかがですか？」
「艶やかな恋の詩にはまだ幼いわ。」

- ※ 花びらに おしゃべり・ベルが 揺れてるよ
- ※ みえない魔法 きこえるヒミツ

3月23日 雨のち快晴

うすい黄のアンブレラもって
タンポポの精と遊ぶ

ゆふふ～♪ りりゆ～♪

「お嬢さん、1 ランデヴーいかがですか？」
「ワタ帽子のパラシュートにはまだ小さいわ。」

フラワー・おしゃべり・ベル
春ウララ♪…ら♪…

思わせぶりな 訳^^